

| | |
|---------------------|---|
| Title | ウィリアム・レイニー・ハーバーにおけるドイツ型研究の価値： シカゴ大学設立以前の言語および聖書研究に焦点をあてて |
| Sub Title | William Rainey Harper's concept on the German type of research: focus on the philological and biblical research prior to the establishment of the University of Chicago |
| Author | 松尾, 麻理(Matsuo, Mari) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 2010 |
| Jtitle | 哲學 No.123 (2010. 3) ,p.251- 269 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | <p>This paper will examine William Rainey Harper's (1856-1906) understanding of the German type of research prior to the University of Chicago. Higher education was the midst of the greatest transformation in the nineteenth century in the United States. Many higher education institutions transformed colleges to universities along with the new concept of research brought by German universities. Although the academic field, such as natural science increasingly accepted the German way of research, the realm of biblical studies remained unchanged. Indeed, America had college professors who made a study in the biblical field; however, their work was not worthy of the name of research. Harper argued that many of the biblical studies in the United States were "second-hand." In other words, many American scholars studied what someone else had already studied, and their work was anything but original. The condition led Harper to regard them as scholars rather than researchers.</p> <p>The purpose of study in German was, in contrast, to discover the truth and to pursue the original. Harper believed that originality was of the highest importance in the conduct of research, and he wanted American biblical scholars to develop such an idea for their work. Harper attempted to convey the idea of true research in the means of publications such as Hebraica and The Hebrew Student in which he served as an editor. Afterwards, his idea on research ended up crystallizing into a definite plan with the University of Chicago. Harper made various plans in order to create an environment in which both students and faculty could make research in their institution.</p> |

| | |
|-------|---|
| Notes | 特集：教育学の射程 投稿論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000123-0251 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

ウィリアム・レイニー・ハーパーに
おけるドイツ型研究の価値

—シカゴ大学設立以前の言語および
聖書研究に焦点をあてて—

—松 尾 麻 理*

**William Rainey Harper's Concept on the German Type of
Research: Focus on the Philological and Biblical
Research prior to the Establishment of the
University of Chicago**

Mari Matsuo

This paper will examine William Rainey Harper's (1856–1906) understanding of the German type of research prior to the University of Chicago. Higher education was the midst of the greatest transformation in the nineteenth century in the United States. Many higher education institutions transformed colleges to universities along with the new concept of research brought by German universities. Although the academic field, such as natural science increasingly accepted the German way of research, the realm of biblical studies remained unchanged. Indeed, America had college professors who made a study in the biblical field; however, their work was not worthy of the name of research. Harper argued that many of the biblical studies in the United States were “second-hand.” In other words, many American schol-

* 慶應義塾大学社会学研究科教育学専攻後期博士課程3年

ars studied what someone else had already studied, and their work was anything but original. The condition led Harper to regard them as scholars rather than researchers.

The purpose of study in German was, in contrast, to discover the truth and to pursue the original. Harper believed that originality was of the highest importance in the conduct of research, and he wanted American biblical scholars to develop such an idea for their work. Harper attempted to convey the idea of true research in the means of publications such as *Hebraica* and *The Hebrew Student* in which he served as an editor. Afterwards, his idea on research ended up crystallizing into a definite plan with the University of Chicago. Harper made various plans in order to create an environment in which both students and faculty could make research in their institution.

はじめに

本論文でとりあげるウィリアム・レイニー・ハーパー (William Rainey Harper, 1856–1906) は、18歳でイエール大学にて博士号を取得後、メイソニックカレッジおよびデニソン大学で教鞭をとった。同時期に、バプテストユニオン神学校に勤め、セム語や聖書学を教授したり、アメリカン・インスティテュート・オブ・ヘブリュー (American Institute of Hebrew) の設立に携わったりした経歴をもつ。さらには、ショートーカ¹におけるサマースクールや *The Hebrew Student* (継続後誌 *The Old Testament Student*) や *Hebraica* といった学術雑誌を立ち上げてその編集を務めるなど多岐にわたり活躍した。そして、1886年に教授としてイエール大学に勤めた後、1891年にシカゴ大学の学長として正式に大学運営活動に精力的に乗り出している。ハーパーは、自身の教師、研究者、編集者といった経験から、シカゴ大学の構想を練り上げていくが、その広大な構想の中でドイツの研究形式を取り入れた研究を基盤とした大学の確立を目指そうとしたと考えられる。本論では、学長就任以前から着目していたドイツ型研究に対するハーパーの考えを追う。

アメリカ高等教育史において、アメリカの大学にドイツ大学モデルの流れを取り込もうとしたのは、周知のとおりハーバーが初めてではない。シカゴ大学の前には、ジョンズ・ホプキンズ大学が、アメリカで最初の研究中心型の大学として、その名が知られている。さらにその後、クラーク大学が、専門的研究を目指して、学部を持たない大学院大学として設立された。この考えはシカゴ大学を生み出す発想と野望が入り混じった重要な部分であった²。これらの大学はすべて、多少にかかわらずドイツ大学の性格を帯びて、研究をすることが期待されて設立に至った。

研究機関としての大学の概念は大部分ドイツの貢献によっていた。この国では「大学」の意味は軽視されたり、膨れ上がった制度的要求によって曖昧にされたりしていた。……大学という言葉も、それが言及していることも研究活動を含んではいなかった。……研究が大学の機能として導入されるには、調査状況における変化——経験的知識の大幅な拡大と調査方法の改善、大学反対の乗り越え、極めて重要なことだが、19世紀において改革派のモデルであり、拍車であったドイツの大学により一層精通すること——を待たねばならなかった³。

このように、19世紀に、アメリカの大学はドイツの大学の影響を受けて変革期を迎えた。シカゴ大学は元々カレッジとして設立が計画されたが、ハーバーは、ユニバーシティでなければ、学長には就かないと主張し、強固に研究中心型の大学をつくらうとした。それは、聖書研究者としてのハーバーの経験が一因していると筆者は考える。

ドイツ流のヴィッセンシャフトを取り入れる動きがあっても、アメリカでは聖書と研究はなかなか結びつかなかった。ドイツのように、聖書が研究の対象として見なされにくかったのである。自然科学が研究の対象として扱われたのと同じように、聖書がテキスト批判を以て研究対象となるこ

とをハーパーは望んだのである。研究の必要性は、聖書学に限らず、他の分野においても言えることだとハーパーはとらえていたが、ドイツの研究に目を向ける中で、まず、それを自身の専門分野において実感したと考えられる。彼はドイツの研究をどのように理解していたのか、本論では、聖書研究に着目して、その一端を明らかにすることを目指す。

先行研究においては、ダニエル・リー・メイヤーが、シカゴ大学における教員採用方式や交渉過程について明らかにしている。そして、大学と教員の間をアカデミックな面や財政面からとらえ、シカゴ大学が開学にあたり、大学における教員の存在を重要視したことが、その立場の位置づけが重要課題の一つであったことを指摘している⁴。しかし、それらを構成するものとなる考えはどこから生じたものなのかを分析するまでには至っておらず、シカゴ大学の方向性を決める重要要素となるハーパーの研究に対する考えの源を本論では明らかにしたい。

また、ウィラード・J・ピューは、ドイツの大学をモデルとしたジョンズ・ホプキンス大学、クラーク大学が、他大学に与えた影響などに触れ、シカゴ大学が研究大学としてつくられていく過程を各大学の歴史的背景と関連づけて明らかにすることを試みている⁵。また、ピューは、主に各大学院研究科の中身を明らかにする実証研究の形をとっているが、本論では、とりわけシカゴ大学設立以前に焦点をあてて、ハーパーがドイツの大学における研究に対してどのような視点を持っていたかについて検討する。

本論では、19世紀におけるアメリカのカレッジからユニバーシティへの推移及びドイツの大学がいかにとらえられているのかについて概観した後で、ハーパーが編集を務めていた複数のジャーナルの編集後記を主な資料として、彼がドイツの大学をどのように認識していたのかを究明する。

1. アメリカへのドイツ型研究思想の移入

アメリカの高等教育は、ドイツのそれとは、だいぶ中身が異なっていた。19世紀のアメリカのカレッジは、学問の場であると同様に、寄宿舎学校であるが故に生活訓練を受ける場でもあった。さらに、カレッジは教派的、宗教的位置づけのための日曜学校のような性格を持ち⁶、社会的目的としての政治的指導者の育成の場所であるとルドルフは、位置づけている⁷。加えて、19世紀前半においては、カレッジの名前は、その名に値するものから高校の名称にも値しないものにまで多数の機関に適用されていたという⁸。

アメリカのカレッジにおいても、もちろん授業は行われていた。しかし、「カレッジは、古典言語と数学を基本とした一つの固定したカリキュラムを教えていた。これに道徳哲学、歴史、一般的に自然科学が加わっていた」⁹ 状態で、ヨーロッパの教育パターンを知る者は、アメリカのカレッジで提供されていることは、ギムナジウムやりセの伝統的な形態と大部分一致すると認識していた¹⁰。しかも、カレッジにおける「これらの教科が有する知的可能性は、暗記と教室での暗誦によって大部分損なわれていた」¹¹ という。つまり、ドイツ留学から戻ったアメリカ人には、アメリカのカレッジはヨーロッパの中等教育機関レベルであり、学問の探究が第一の目的に設立されていないと映ったのである。彼らが、このような高等教育の状況を目の当たりにして、失望感を覚えたのは想像に難くない。しかし、彼らは、その状況に甘んじることなく改革を訴え、大学院を含めた研究の場をアメリカの高等教育機関に求めたのであった。

アメリカ人は、ドイツ型大学に以下の4つの基本要素を見出していた¹²。1) ドイツ人は、大学に適した高等教育とギムナジウムに適当な準備学習を明確に区別している。2) 大学はその使命を知識の向上とオリジナル研究の指導であると考えている。3) 大学は、知識を追求するのに必要

な独立を教授と学生に与えている。4) これらの研究理念は、特徴的な制度方式——特に、セミナー、研究者養成、Ph.D.、能力認証に現れている。改革者は、アメリカにドイツの大学をそのまま再現するつもりはなかったが、これらの4つの要素が、最終的に上級課程を形作っていくことになった¹³。こうして、ドイツ留学を経て感じたことや、批判、提案が結果的に科学や研究、学問を推奨するような新しい機関の構想となっていき、ドイツの大学は、アメリカの新しい大学のモデルとしてとらえられるようになったのである。ただ、ドイツの影響がアメリカの研究大学への道をすべて作り上げたわけではない¹⁴。しかし、「ドイツの例が全てを説明しないとしても、多くのことを説明する」¹⁵とターナーらは論じている。例えば、自国の社会的変化がアメリカの研究大学の最深ルーツであったとしても、ドイツは「研究の理想」をもたらしている¹⁶。

歴史学者のストアに言わせれば、1861年にイエール大学がPh.D.を出すまで、カレッジと区別してアメリカに大学（ユニバーシティ）は存在しなかった¹⁷。アメリカには長らくPh.D.の学位を出す大学は存在しなかったのである。イエールに続いてハーバード大学が1873年から、コロンビア大学が1875年から、さらにジョンズ・ホプキンス大学が1878年からPh.D.を授与している¹⁸。そして、シカゴ大学が初のPh.D.を授与したのは、1893年のことである。さらに、アメリカ大学協議会(The Association of American Universities)が1900年に設立されてから、大学院コースを提供し、Ph.D.の学位を出す機関を大学と定義する見解が打ち立てられた¹⁹。また、Ph.D.の基準だけでなく、Ph.D.レベルの研究に学生を用意できるカレッジの水準も決められるようになったのである²⁰。

アメリカの研究大学への関心は、もちろん、ドイツ帰りの人々の提唱だけでなく、19世紀に新しく入ってきた科学的見地など他の様々な要因に因るものであるが、いずれにせよ、そうした高等教育が変わりつつある時流の中で、ハーパーは研究と研究を担う大学の在り方について確固とし

た考えを持つようになる。

2 理想像としてのドイツの大学教員

ハーバーがシカゴ大学をカレッジではなくユニバーシティにすることにこだわった一つの理由には研究活動があげられる。ハーバーの研究に対する姿勢は、研究に比重をおいたドイツの大学の方針を多分に含んでいると考えられる。シカゴ大学は、既存の多くのアメリカの高等教育機関とは異なり、最初から研究を目的とする大学として設立され、教員には研究が教授よりも優先されたのである²¹。

ハーバー自身はドイツの大学に留学した経験はないが、イエール大学院時代に、ウィリアム・ホイットニーに師事を仰いでいる。ホイットニーは、当時言語学研究において全国に名の知れた学者であり、ベルリン大学への入学も許可されている。彼が、いかに研究にうち込み、その興味関心と研究で全ての学生に強い影響を与えたかをハーバーは記憶している²²。熱心に研究に取り組み、論文を執筆し、学生を導くそのホイットニーの姿はハーバーにとって大学教員の一つのモデルであったと考えられる。

また、ハーバーは日頃から自分の専門である聖書学や言語学の分野において、ドイツの大学の様子やドイツ研究者の動向を注意深く観察していた。ただ、それはハーバーに限ったことではなく当時聖書学関連を研究対象とする者は、多かれ少なかれドイツへ注意を向けていたようである。例えば、1885年の段階でライプツィヒ大学のセム語・旧約聖書研究学科におけるアメリカ人の多さが雑誌に載せられたり²³、“Notes from Abroad”という題目でドイツの大学においていかなる講義が開講されていたのかが報告されたりしている。ライプツィヒ大学については、ハーバーもしばしばその名をとりあげており、当時その分野の最先端と彼が考えていたと推測される。さらに「ベルリンの旧約聖書研究」と題して、その分野における教授を数名とりあげ、彼らの研究や講義方式などについて論文が著され

ている²⁴。ドイツの大学における研究は注目に値するものであったのだろう。ハーパーの編集するジャーナルにはドイツの研究者や彼らの研究についての言及がたびたび見られる²⁵。ハーパーは、ドイツの聖書学や言語学の研究者たちが何を論じているのか、彼らの中でどのような動きがあるのかについて注意を向けていたのである。

ただ遠巻きにドイツ研究者の動向を見守っているだけではなく、彼らを実際にシカゴ大学へ招聘することをハーパーは企画している。冬休みを利用して旧約聖書の問題を議論しようとドイツの大学から教員をシカゴ大学に招くことをジャーナル *The Hebrew Student* を通して知らせている²⁶。ライプツィヒ大学、ベルリン大学、ギーゼン大学などから教授陣を招く予定であり、各講師がどの大学で何の講義を担当しているかを紹介している。これらを列挙することで、セム語学研究がいかにドイツでは徹底されているか、教員らがいかに多くの時間をさいて研究を行っているかが分かるだろうとハーパーは読者に呼びかけている。かつ、ライプツィヒ大学を例に挙げて、8人もの講師が雇われ、週に60時間授業が開講されていることを述べている²⁷。ドイツの大学の講義がいかに充実したものであるかをハーパーは示したかったのである。

ハーパーは、ドイツに留学しなかったが、ホイットニーに学んだり、ドイツ大学教員の動向に着目したりする中で、研究を中心に据えた大学教員の理想像を形成していったと考えられる。そして何よりも、彼らの研究成果を認め、自身の編集するジャーナルを以て国内の研究者らに広めることに努めている。

3 ハーパーにおけるドイツ型研究への評価

ハーパーにとって、ドイツはセム語学と旧約聖書学分野において世界のリーダーであった。「他のどの国の人も研究と調査にそこまで完全にどこまでも専念しないし、深く掘り下げることはないということはよく知られ

ている」²⁸と述べてドイツ学者の研究に対する姿勢を礼賛している。さほど深くなくとも、明らかなことが大きければ有益であると感じるアメリカ人の学者にとっては、この深さは驚きかもしれないが、ドイツの研究ほど高い評価を受けている研究はないとハーパーは断言している。したがって、そこでどのようなことが研究されているかを知ることがとても重要なことであり、世界で最も偉大な聖書学者の研究、見解、動向にとっても興味があると述べている²⁹。

また、他の国ではセム語研究が受けるに値する注意が払われていないかもしれないが、ドイツではそうではない。セム語学研究においては、ドイツはヘッドクォーターであるとハーパーは断言している³⁰。続けて、人はドイツの専門家によってなされた研究成果を素晴らしいと感じずにはいられないと思うと述べ、その所以を、彼らが教師というよりはむしろ研究者であるからと言う。ドイツの学者は、学生の前に研究の成果を表し、学生を直接手助けすることを目的とせず、真実を発見することを目的としているとハーパーは観察し³¹、ドイツの教授は極度まで研究するが、アメリカ人の教授はそうではないこともあわせて述べている。アメリカにも研究はもちろん存在しているのだが、その取り組みの姿勢がドイツのそれには及んではいないとハーパーは認識しており、アメリカにおける聖書学や言語学の研究がドイツのレベルにまで達することを望んだのである。

しかし、ハーパーは、ドイツの研究者が論じているからといって、彼らの論じることを鵜呑みにしていたわけではない。例えば、ドイツのユリウス・ヴェルハウゼンの論文「イスラエルの歴史」(“History of Israel”)とイギリスのロバートソン・スミスの論文「ユダヤ教会における旧約聖書講義」(“Lectures on the Old Testament in the Jewish Church”)によって当時モーセ五書に対する論争が起こっていた。その論争は、ヴェルハウゼンの研究結果のせいというより、出エジプト記や立法の歴史を伝説や単なるフィクションと断言する不適切で根拠がない態度のゆえに生じると

いったことをハーパーは述べる³²。一方で、ライプツィヒ大学のフランツ・デーリヒについては「歴史の真実を否定することなく、聖書に抱く敬意を放棄することなく」記録などの統合をはかろうとする姿勢を評価している³³。ハーパーは、とりわけドイツにおいて彼の専門である旧約聖書やセム語学研究がいかにも論じられているかに注意を向けており、彼らの論を自分なりに解釈していた。ヴェルハウゼンについては他の箇所でもその名前についてふれており³⁴、彼の動向について注目していたことがうかがえる。ハーパーはデーリヒについてもヴェルハウゼンと同様にとりあげている。ただ、こうしたドイツ研究者の新たな思想をジャーナルに掲載させることにより、読者から非難がよせられるようになっていた³⁵。しかし、先述したように、ドイツの高等批評³⁶を丸ごとハーパーは受け入れていたわけではない。その中でも保守的なものもあれば、福音主義的なものなどに分かれることをハーパーは認識していた³⁷。ただ違った角度から物事をとらえて新たな発見をすることをハーパーは重要視していたのである。「『新たな批判』が少なくともその中にいくぶん真実を携えていることは確実にありうるのである。全体的に見れば、良いことがその中から出てくることがある」³⁸ というのがハーパーの信ずるところであった。故に、*The Hebrew Student* のようなジャーナルを通して読者は学ぶことができたと主張できたのである³⁹。

The Old Testament においても、高等批評にたった論文⁴⁰を掲載しているが、ジャーナルの立場はどうであるのかと読者から問われていることをハーパーは明かす。そこで、ドイツの定評ある学者は多かれ少なかれ高等批評が達した結果を認めていると述べていることから、ドイツの聖書学研究をハーパーが高く評価していたことが分かる。加えて批判している人が全てヴェルハウゼンのようであると想定することは正しくなく、デーリチらのように多かれ少なかれ高等批評の結果を認めているが、かつ福音派のままにいる人達もいるのだと論じており⁴¹、ドイツ輸入の理論が全て正し

いと限らないということをはハーパーは再度確認している。批判的研究法を用いるすべてのドイツ人が「真実及び福音主義キリスト教に対する愛、神の愛に満ちた心」を持ちあわせているわけではないことを述べ⁴²、ハーパーが闇雲にドイツ学者たちを礼賛していなかったことがうかがえる。しかし、様々な議論を経て、今後ドイツやイギリスでこれまで出版されなかったような内容の論文が *The Hebrew Student* に載ることがありうると述べ⁴³、議論を通してジャーナルがより良いものとなっていくことに期待感を込めている。

以上のように、ハーパーは、聖書学研究におけるドイツ人とアメリカ人の学者の違いを分析し、アメリカ人の未熟な点を認識していた。それは、真実の発見を追求する姿勢であり、国内の聖書学研究の発展のためには、欠かすことができない要因だとハーパーは考えていた。加えて、これまでになかった批判、議論の中にも得るものがあり、批判などを通して、研究のより良い成果が期待されることもあるという考えを持っていた。

4 アメリカにおけるドイツ型研究への期待

アメリカにおける聖書学研究や関連ジャーナルに対するハーパーの期待感は、ドイツの大学に学んだアメリカ人が帰国したことでさらに高まっていったと推察される。その証拠に例えば、1884年、ベルリン及びライプツィヒ大学に学んだポール・ハウプトがドイツから戻り、ジョンズ・ホプキンス大学のセム語学科の教授に就任したことなどをジャーナルで報告している。ジョンズ・ホプキンス大学で開講される語学の講義や受講する学生の人数などを挙げるとともに、受講学生の能力の高さにあわせて授業の要求があり、ドイツにいるような能力のある講師によってアメリカ国内でその要求が満たされるであろうことにハーパーは喜びを感じている⁴⁴。そして、ハウプトの就任が、アメリカの高等教育におけるセム語学を発展させていくことを期待している。数年後もジョンズ・ホプキンス大学のセム

語学科におけるハウプトがどんな語学の講義を担当しているのかについての記述が見られ、ハーパーが彼のはたらきをおっていたことがうかがえる⁴⁵。他にも、ライブツィヒ大学で Ph.D. を取得したリチャード・ゴッドヘイルがコロンビア大学のシリア語とラビ文学の教授に任命されたり⁴⁶、デイビッド・リオンがハーバード大学でヘブライ語、セム語学の講師に就任したりしたことを報告している⁴⁷。リオンはライブツィヒ大学で論文を提出し、Ph.D. を取得した。ハーパーはその論文を独創性があり、丹念な研究で、既に著名な学者らから評価を得ていると評価している。ハーバード大学に続いてセム語学分野でさらなる徹底した研究のために何ができるかをハーパーは問い、こうした方面への変化は満足をもって歓迎されるだろうと述べている⁴⁸。後にリオンは、「アッシリア学と旧約聖書 (“Assyriology and the Old Testament”）」と題して「創世記の始めの方の章はアッシリア人から後の年代に取り入れたものであるということが想定される根拠」について論じていることを紹介し、「この手の論題について詳しくない人は、その論を興味深く衝撃的にとらえるだろう」とハーパーは述べ⁴⁹、リオンの論文を高く評価している。こうしてドイツの大学で学んでアメリカの大学で教授職に就いた者たちにハーパーは高い期待を寄せ、彼らを契機として国内の聖書学やセム語学分野の研究が発展していくことを願ったのである。

シカゴ大学設立以前から、ハーパーは教えることに加えて、研究することにも力を入れており、既にジャーナルに論文等を発表していた。そうした論文の中で、ハーパーは研究の重要性について説いている。例えば、ジャーナル *Hebraica* の刊行にあたっては「セム語の研究についての様々な学部に関わる学者間のコミュニケーションの手段として役立てることを目的としている。特にオリジナルの研究を奨励する」⁵⁰ と述べ、*Hebraica* が高等教育の目的に長く価値あるものとして奉仕し、研究に寄与できることを目指した。*The Hebrew Student* の刊行に際しても、批判的質問を是

とし、研究を促進することをその目的にあげている⁵¹。

「批判が我々の考えを広げて、聖書の真実について我々の思考における明らかな間違いを取り除き、新しい光の下に真実を添えてくれるのである」⁵² と批判することの重要性をハーパーは説く。しかし、だからと言って批判が全て正しいと主張しているのではない。批判によってうち出された論は、歴史的、哲学的、神学的研究にたえられるものでなければならぬとハーパーは考えていた⁵³。つまり、根拠なく批判したり、内容のつじつまが合わなかったりしては意味がなかったのである。

さらに、新しい考えが取り入れられるということは、これまで受け入れられていた考え方に一部もしくは全体がとってかわられるということである。しかし、そうならないために保守的な考えにのみ固執するわけにはいかないことを述べ、複数の説が出ればそれをつきあわせてみる必要性を論じる⁵⁴。ここでもハーパーはその論を慎重に運ばねばならない旨を述べるが、*The Hebrew Student* においては、真実のために、いかなる論が論じられるのも許されるし、また批判を行うこともできるということを読者に向けて論じている⁵⁵。

ただ新たな批判というのが常に正しく歓迎されるものではないことをハーパーは念押ししている。安っぽい読み物や粗雑な新聞記事、思慮の足りない説教などを通してそれが、読者に押しつけられているが、継続後誌の *The Old Testament Student* は、そのような議論の場ではないとハーパーは述べている⁵⁶。つまり、時間をかけてしっかりと研究されて出された論のみが議論の場に持ち出されるに値するとハーパーは考えていたのである。そうして導きだされた論は、議論されるのは構わないという姿勢をハーパーはとっている。しかし、ジャーナルを議論の場とすることと合理主義的で有害な批判のための機関誌とすることは、全くの別物であり、前者は歓迎されるが、後者は非難すべきであるとハーパーは述べる⁵⁷。

とりわけ神学については、長年にわたって聖書解釈が固定化していて、

それが踏襲されるのが慣例化していたが、ハーパーは教義の神学 (dogmatic theology) と聖書の神学 (Biblical theology) を別物として区別している⁵⁸。前者は、誰かが既に研究したことや参考書などについては詳しいが、後者は研究によって、オリジナルの新たな発見を得るという点で異なる。この点が自身の専門分野においてドイツの学者とアメリカの学者の違いであると感じていたのである。

実際、アメリカの学者がドイツの学者レベルに到達していない理由の一つは、アメリカ人は独自の研究やオリジナルの調査の極意をまだ身につけていないからであるとハーパーは分析している。ドイツ人が能力があるからでも勤勉であるからでもなく、間接的 (second-hand) 研究や間接的権威に満足してしまうことが問題なのである、と⁵⁹。そして、注釈書やどこそこの神学部のアドバイスなしに、どれだけの学生が創世記の原書に独自にあたったことがあるかを問うている。ただ、旧約聖書学科における状況は随分改善され、ヨーロッパからも認められるようになってきており、アメリカ人は旧約聖書の分野において他国の人と同じように一流の研究をすることは可能なであると述べている。問題を把握し、正しい研究方法を知ることによって、アメリカは最高の結果を生み出すことができるとハーパーは信じていたのである⁶⁰。

ハーパーはただドイツに倣うことだけではなく、新しい思想や理論というのは、注視されるべきで、アメリカ人の旧約聖書学者がどうとらえているのかを知らせることが大切なのであって、彼らの意見が出版される時が来たと考えていた⁶¹。ドイツを騒がしている批判的疑問にアメリカ人は無関心でいるわけにはいかないものであり、アメリカには徹底してこの手のテーマについて研究してきた者たちがいるからその研究結果を披露させるべきであえると唱えた⁶²。しかし、「たった一つの論文が何年にもわたり積み重ねられた研究より多くの損傷を招くこともある」として何と論ずるかについては細心の注意が必要であることを促す。そして「ゆっくり急げ

(Make haste slowly)」が原則であり、変化が訪れるとすれば、それは徐々にでなければならぬと念を押した⁶³。研究結果を出版することを奨励してはいたが、当時のアメリカ社会においては、特に聖書学分野では受け入れられ難い論があることも承知しており、同時に慎重でなければならぬこともハーパーは自覚していたのである。

つまり、ハーパーは、ドイツ型の研究を奨励する一方で、とりわけ聖書研究は必ずしもアメリカで快く受け入れられないことを認識していた。正統派による教義以外は異端とみなす風潮があったからである。故に、いかなる論も慎重に議論がなされていなければならないし、道理に立つものでなければならぬと考えていた。ドイツ型研究をそのままアメリカの大学へ性急に取り入れたところで、うまく機能しないことをハーパーは認識していたのである。一方で、ドイツ型研究から倣う点があることを認め、ドイツに学んだアメリカ人研究者たちが帰国して、国内の聖書学分野において、その発展に寄与することを期待し、議論を経て質の高い研究が生み出されることを待ち設けたのであった。そして、ドイツ研究者の研究姿勢やドイツの大学の教員の扱い方について是と思う点が、結果的にシカゴ大学における実践に結びついていったと考えられる。

おわりに

ハーパーは、1880年代に *Hebraica* と *The Hebrew Student* を立ち上げている。これらのジャーナルは、ハーパーにとって学習雑誌以上の存在であった。いわば学会誌であり、ハーパー自身のジャーナルであり、編集者という立場を超えて、積極的に発言をして表に出たのである。そこで、彼が述べたかったのは、高等批評を例とした聖書学への新たな研究への視点であった。旧約聖書学者、セム語学者として、ドイツにおける研究の動向に着目する中で、研究の先端を行くドイツの大学から倣うことがあることをハーパーは認識していた。彼はドイツの大学から「研究とは」という

姿勢を学び、それを高く評価したのである。そして、1891年にシカゴ大学の学長職を受諾してからは、第一に探究精神に価値をおく大学づくりを目指すようになった。これは、他学部同様、神学部も例外ではなかった。神学部の目的の中で「旧約及び新約聖書の批判的な翻訳と解釈において」⁶⁴ 学生は教育を受けること、と明文化し、聖書の批判的研究を大学内に取り入れたのである。聖書も研究の対象となることをシカゴ大学設立にあたってハーパーは明示したのであった。

研究調査の目的にかなうため、ハーパーは大学施設の充実化を図り、大学の図書館や出版施設の構想を練った。さらに、大学学部においては、3年生以上は、研究ができなければならないし、大学は研究者も養成しなければならないという考えをもち、教員が研究に時間を費やすことができるように一週あたりの授業時間数をおさえるなどしている。

大学の制度面については、より深い考察が必要であり、別の機会に論じることとしたい。シカゴ大学における研究の実践を明らかにするとともに、学問と専門性の折り合いをどのようにとらえていたのか、学位や大学院の問題などを究明していくことを今後の課題としたい。

註

¹ 非伝統的教育 (nontraditional education), 宗教や人文科学のセンターとして1874年にニューヨーク、ショートーカに設立された。1878年には、The Chautauqua Literary and Scientific Circle が立ち上げられ、全米初の成人教育プログラムと通信教育学校を始める。通信教育課程やサマースクールの先駆けとなる。

John C. Scott, "The Chautauqua Movement: Revolution in Popular Higher Education," *The Journal of Higher Education*, Vol. 70, No. 4 (Jul.-Aug., 1999), 2-3. 参照。

² Roger Geiger, "Introduction: New Themes in the History of Nineteenth-Century Colleges," in *The American College in the Nineteenth Century*, ed. Roger Geiger (Nashville: Vanderbilt University Press, 2000), 30-31.

³ Richard Hofstadter and Walter P. Metzger, *The Development of Academic Freedom in the United States* (New York: Columbia University Press, 1955),

- 369.
- ⁴ Daniel Lee Mayer, "The Chicago Faculty and the University Ideal, 1891-1921" (Ph.D. diss., University of Chicago, 1994).
- ⁵ Willard J. Pugh III, "The Beginnings of Research at the University of Chicago," (Ph.D. diss., University of Chicago, 1990).
- ⁶ F・ルドルフ, 『アメリカ大学史』, 阿部美哉, 阿部温子訳 (玉川大学出版部, 2003年) 85.
- ⁷ 同上, 78-80.
- ⁸ R・ホフスタッター, 『カレッジの時代』, 井門富二夫, 藤田文子訳 (東京大学出版会, 1980年) 290.
- ⁹ Roger L. Geiger, *To Advance Knowledge: The Growth of American Research Universities, 1900-1940* (New York: Oxford University Press, 1986), 3.
- ¹⁰ Ibid., 4.
- ¹¹ Ibid., 3.
- ¹² James Turner and Paul Bernard, "The German Model and the Graduate School: The University of Michigan and the Origin Myth of the American University," in *The American College in the Nineteenth Century*, ed. Roger Geiger (Nashville: Vanderbilt University Press, 2000), 222.
- ¹³ Ibid.
- ¹⁴ Turner and Bernard, "German Model," 222.
- ¹⁵ Ibid., 223.
- ¹⁶ Ibid.
- ¹⁷ Richard J. Storr, *The Beginning of the Future* (New York: McGraw-Hill Book Company, 1973), 37.
- ¹⁸ 潮木守一, 『大学と社会』 (第一法規出版, 1982年), 4-5.
- ¹⁹ Storr, *The Beginning of the Future*, 45.
- ²⁰ Geiger, *American College*, 31-32.
- ²¹ Thomas Wakefield Goodspeed, *A History of the University of Chicago: The First Quarter-Century* (Chicago: University of Chicago Press, 1916), 146.
- ²² "Editorial Notes," *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 1 (Apr., 1882), 11.
- ²³ Ira M. Price, "Notes from Abroad," *The Old Testament Student*, Vol. 4, No. 6 (Feb., 1885), 276.
- ²⁴ "Old Testament Work in Berlin," *The Old and New Testament Student*, Vol. 11, No. 1 (Jul., 1890), 26-30.
- ²⁵ "Old Testament Notes and Notices," *The Old Testament Student*, Vol. 7, No. 5 (Jan., 1888), 169.
- ²⁶ "Semitic Study in Germany," *The Hebrew Student*, Vol. 2, No. 4 (Dec. 1882), 120.
- ²⁷ Ibid., 121.
- ²⁸ "Notes from Abroad," *The Hebrew Student*, Vol. 2, No. 7 (Mar., 1883), 217.
- ²⁹ Ibid., 217.

- ³⁰ “Semitic Work in the German Universities,” *The Old Testament Student*, Vol. 4, No. 8 (Apr., 1885), 379.
- ³¹ Ibid..
- ³² “Editorial Notes,” *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 2 (May, 1882), 11.
- ³³ Ibid.
- ³⁴ “Editorial Notes,” *The Hebrew Student*, Vol. 2, No. 1 (Sep., 1882), 26–27.
“Editorial Notes,” *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 4 (Jul., 1882), 71.
- ³⁵ “Editorial Notes” *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 4 (Jul., 1882), 71.
- ³⁶ 高等批評 (Higher Criticism) とは聖書研究法の一つである。高等批評は「本文批評の結果から、内容の真正 (根拠)、真性 (原作者といわれていることの立証、反証に関して)、聖書中の幾冊かの本についての出所と特徴について調べる。」原書の研究にあたり、次のような質問から答えを得ようとする。「文書が裏づけられているため記述を信頼できるか。著者は率直で信用できるか。著書が引用している元の資料は何か、そしてそれらは信用できるのか。誰が著者か。書かれた時代や場所は、書かれた物は改定版なのかオリジナルなのか。どんな文学形式をとっているのか。」本文批評 (Textual Criticism) が、文書の現存する写本から本文を研究対象とするのに対して、高等批評は、それを基に著者の問題や執筆年代を扱うことに用いられる。
“The ‘Higher’ Criticism,” *The Hebrew Student*, Vol. 2, No. 7 (Mar. 1883), 217–218, “The Term Higher Criticism,” *The Old Testament Student*, Vol. 3, No. 8 (Apr., 1884), 310–311 を参照。高等批評は正統派による聖書の伝統的解釈の誤りを指摘した。
- ³⁷ “The Term Higher Criticism,” *The Old Testament Student*, Vol. 3, No. 8 (Apr., 1884), 310–311.
- ³⁸ “Editorial Notes,” *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 4 (Jul., 1882), 71.
- ³⁹ Ibid., 71–72.
- ⁴⁰ “In Reference to Higher Criticism,” *The Old Testament Student*, Vol. 3, No. 5 (Jan., 1884), 164.
- ⁴¹ Ibid.
- ⁴² “Editorial Notes,” *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 1 (Apr., 1882), 11.
- ⁴³ Ibid., 11.
- ⁴⁴ “Semitic Study at Johns Hopkins University,” *The Old Testament Student*, Vol. 3, No. 6 (Feb., 1884), 210.
- ⁴⁵ “Old Testament Notes and Notices,” *The Old Testament Student*, Vol. 7, No. 5 (Jan., 1888), 168.
- ⁴⁶ “Old Testament Notes and Notices,” *The Old Testament Student*, Vol. 7, No. 3 (Nov., 1887), 103.
- ⁴⁷ “Another Professor of Hebrew at Harvard,” *The Hebrew Student*, Vol. 2, No. 1 (Sep., 1882), 26.
- ⁴⁸ Ibid.
- ⁴⁹ “Old Testament Notes and Notices,” *The Old Testament Student*, Vol. 7, No.

- 5 (Jan., 1888), 168.
- ⁵⁰ William Rainey Harper, "The Purpose of Hebraica," *Hebraica*, Vol. 1, No. 1 (Mar.-Apr.-May, 1884), 1.
- ⁵¹ "A General Statement," *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 2 (May, 1882), 10.
- ⁵² "The Overestimate of Criticism," *The Old Testament Student*, Vol. 3, No. 9 (May, 1884), 360.
- ⁵³ Ibid.
- ⁵⁴ "Editorial Notes," *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 1 (Apr., 1882), 11.
- ⁵⁵ Ibid.
- ⁵⁶ "The Old Testament Student and the 'new' Criticism," *The Old Testament Student*, Vol. 3, No. 8 (Apr., 1884), 313.
- ⁵⁷ Ibid.
- ⁵⁸ "Editorials," *The Old and New Testament Student*, Vol. 10, No. 4 (Apr., 1890), 196.
- ⁵⁹ "Editorial," *The Old and New Testament Student*, Vol. 6, No. 8 (Apr., 1887), 225-226.
- ⁶⁰ Ibid., 226.
- ⁶¹ "Editorial Notes," *The Hebrew Student*, Vol. 1, No. 3 (Jun., 1882), 51.
- ⁶² Ibid.
- ⁶³ Ibid.
- ⁶⁴ *Official Bulletin No. 5* (March, 1892), 6.

※本研究は、平成 21 年度慶應義塾大学学事振興資金（研究科枠）の助成を受けたものである。